

L-1 東松島市浜市地区

2012年1月13日(金)

報告者名	木村 敏明	被調査者生年	1944年(男)
調査者名	木村 敏明	被調査者属性	浜市区長
補助調査者	赤尾 智宏		

話者情報

話者家は、津龍院の過去帳によると、少なくとも230年前から浜市に住んでいる。

話者は石巻で被災し、震災後2日目の3月12日は浜市小学校の体育館で過ごし、その後東松島高校へと避難所を移った。避難所は床下がコンクリートで非常に寒く、また足も伸ばせないほど多くの人々が避難していた。話者は心臓が悪く、通院していたこともあり、健康面を配慮して娘の家に移った。5月1日より現在の住居にアパート住まいである。

話者の自宅には津波によって泥が流れ込み、アルバムなど記念写真が失われた。

話者は農家をやっていた。現在、農地の除塩や地盤整備が進められているが、農業を再開するとなるとトラクターなどの機械が必要で1,000万位の資本がいる。先を考えると元がとれるかどうか分からないので、今年からは土地を貸すということになるだろう。

浜市地区の被災状況

浜市地区の人口は、135世帯470人。地区は壊滅状態で、ほとんどの家が流出し、51人が亡くなり、1人が行方不明である。

昨年の5月1日に浜市地区の住民の間で、高台への移転など今後の地区の在り方について話し合いの場が持たれた。公営住宅に住むか、震災以前と同様に浜市地区に住むか、集団移転するか、いくつかの意見が出された。市から提示された移転先も浸水区域だったので移転しても同じではないかという意見もあった。

浜市地区の田畑は津波でほぼ全面が浸水した。

浜市で農業従事者は40人、漁業が10人弱、自営業・大工が10人、それ以外の大多数が勤労者である。農家の多くは農作業、農地を委託していたが、今回の震災でほとんど全ての農家が委託することになるだろう。

地盤整理がされ、今年から苗植えは可能になるが、話者は今回の津波でトラック2台が流出し、農家を出来る状態でない。

2月より、浜市地区の住民に対して個人面談が始まる。市から提示された浜市の土地買い上げの額は、予想よりも高く震災前の8割、2万8千(坪?)ということになっている。ただしこれは宅地みの価格で、農地については同様に買い上げを要望し、次回の面談で回答をしてもらうことになっている。予想よりは高かったが、例えば駅周辺の土地は8万位なのでそれを買えるほどの額ではない。

震災前住んでいたのは、子ども夫婦が浜市以外の場所で暮らしている老夫婦がほとんどであった。

宮崎町の参加者を泊めた浜市の住民との間には個人的な交流があり、今回の震災で避難所暮らしを強いられ、お風呂に入られなかった人を宮崎町上町にある温泉ユースランドに連れて行くなど、支援があった。6月末まで、週に1・2回温泉へバスで送迎してもらった。また、6月には見舞金も貰った。

浜市の住民は、いくつかの仮設住宅で生活している。

潮垢離行事に関する被災状況

昨年3月14日に潮垢離行事について、浜市、宮崎町、熊野神社総代、役員4、5人で最終打ち合わせが開かれることになっていた。

4月15日、16日の2晩で潮垢離行事を行う予定で、浜市漁港の漁船に神輿をのせて運んでもらえるよう依頼するつもりだった。今回の潮垢離は区長の話者が中心であり、20年前の前はA氏が実行委員長を務めた。A氏は浜市地区の生き字引の様な人で、潮垢離行事についても精通していたが、今回の震災で亡くなった。

潮垢離は、区の主催ではなく、B家個人に宮崎町から神輿が運ばれていた。区から個人に要請して実施されていた。浜市には鹿野、阿部姓が多く、鹿野姓が一番古い家であり、2、3の分家に分かれている。

前回の祭主はC氏で、3年前に亡くなった。C氏の妻は今回の震災で亡くなり、息子のD氏はC氏より先に亡くなっていた。

今後の潮垢離の「祭」は熊野神社に依頼することになり、大々的なことはできなくなる。

昨年は、誰がご神体を「潮垢離する」かについては未定であった。行事の詳細については、熊野神社側に委ねられることになりそうである。

過去の潮垢離行事

20年前、前回の潮垢離行事は、2日間かけて行われていた。潮垢離に必要な費用は、全戸から3,000円徴収していた。

1日目、宮崎町からクルマで浜市まで神事で使用する神輿を運んだ。

途中、神輿は鳴瀬町の役場前に寄り、町長からあいさつがあり、鹿踊が披露された。

鳴瀬第一中学の近くにある小野幼稚園で、神輿が受け渡される。白い衣装を身にまとった浜市の若者が、4km歩いて鹿野家まで神輿を運んだ。神輿は、鹿野家のザシキで臼の上に安置される。

宮崎町の参加者70~80人が、一軒に2~3人ずつ浜市の各家庭に宿泊し、もてなしを受けていた。現在は、一人暮らし、老夫婦が多く、負担が大きいため、前回のように宿泊してもらうのは難しい。昨年は、民宿や地区センターに替わりに泊まってもらう予定だった。40年前の前々の潮垢離行事は、(宮崎町の参加者は)バスで来ていた。それ以前は、小牛田から何日もかけて歩いて来ていた時期もある。

2日目、神輿と共に宮崎町の鹿踊が浜市を練り歩く。通る場所はあらかじめ決まっている。

浜市漁港から船2艘に神輿を乗せて、「ドウバ」と呼ばれる浜辺まで運び、見物人は橋で浜辺

まで移動する。

浜辺に着くと、竹を4本立て、竹を縄で結びつないで、「お参りする」ために作られた空間で神事が始まる。祭壇は、海の方に向かって設置されている。

潮垢離行事で、神輿に入ったご神体を海水で「お潮垢離」するのC氏の役割だった。

神事後、宮崎町の神主からお札が配られる。

浜では宮崎町の参加者が、浜辺の砂を袋に入れて持って帰った。

浜市地区の宗教施設

今年は、浜市の石上神社で祭はなかった。秋の祭では神輿を担いでいた。石上神社の宮司は、東松島大潮出身である。

浜市の全ての住民が石上神社の氏子というわけではない。135世帯を7つの組に分け、行事、施政に当たる。その各隣組から総代が7名選ばれ、その中から総代長が1名選出される。

曹洞宗津龍院は浜市の檀那寺である。岩戸山にも檀家を持っている。

ドヤブシ

大正時代、浜市には現在より漁師が多く、漁に出るときに歌われていたのがドヤブシである。浜市に伝わっていた唄であり、現在はドヤブシの保存会もある。

秋の祭の神輿について回り、ドヤブシを歌う祭好きの老人がいた。その老人の子孫がドヤブシを覚えていて、継承した。ドヤブシは、盆踊りや浜市小学校の運動会で披露された。